

2023年1月22日 主日礼拝

説教題「むすぶ」ヨハネによる福音書 15 章 11～17 節

主任牧師 加藤 誠

**「これらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたの内にあり、あなたがたの喜びが満たされるためである」(ヨハネ15章11節)、「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと」(同16節)**

先週の17日、阪神淡路大震災から28年目の朝、神戸の東遊園地にはたくさんの灯籠のともし火によって「むすぶ」という文字が浮かび上がっていました。震災の記憶の風化が懸念される中で「人と人、場所と場所、思いと思いをむすぶ」との願いが込められて選ばれた言葉のようです。追悼の集いでは、20歳8か月のお嬢さんを亡くされた75歳の父親が次のように語っておられました。

震災の二日前の成人式で「一步一步を大切に生きていきたい」と語った娘は、その一步を踏み出すことなく遠くに逝ってしまいました。震災当日の夜にたどり着いた娘のアパートはがれきの山だったので近くの避難所を回った。翌朝、少し明るくなってきたのでがれきを除けていると娘の足を見つけた。こたつに寝ていたようで、二階のはりが落ちてはさまれた状態だった。今も、娘の足の触れた時の氷より冷たい感触と、目の前に居ながら助け出せない情けない自分を鮮明に思い出す。娘の大学の先生が娘のレポートを送ってくれた縁で、大学で話をさせてもらった時、一人の学生が応答してくれた。「生と死は、両極にあるのではない。みんなの心から忘れ去られたときにほんとうの死が訪れる」。将来の夢や思いを何一つ実現できないまま逝ってしまった娘の無念さを思いながらも、このようにわたしが「生きることの意味」について語らせてもらう時、娘は生きているのだと思う。今日、言葉足らずの私に娘のことを語る機会を与えてくださった皆さんに感謝します。

この方の話を聴きながら、「追悼」とは「悼み悲しむ」ことを通して、亡くなった人の命と自分の命とを「むすび」合わせ、自分が「今これから生きる意味」を考え続けていくことなのではないか。亡くなった人は帰ってこないが、残された者たちがその人の生きた意味を考える続けるところでその人は生きるのであり、私たちは自分たちが生きる意味を受け取りなおしていくのではないかと考えさせられました。

そのように「むすぶ」という言葉の意味するところを思い巡らす中で、聖書では「むすぶ」という言葉がどのように用いられているだろうかと考えてみました。

聖書では「むすぶ」という言葉が印象的に次のように用いられています。

一つは、旧約聖書に繰り返し出てくるのですが、神がイスラエルの民と契約を「むすぶ」という宣言。この場合の主語は神さまです。神がイスラエルを選び、関係を結ぶ。つながる。ですから、どんなにイスラエルが不実であつても神の方から手を切り、関係を断ち切ることをされません。神は絶えず招き続けています。例えばイザヤ書は

こう語っています。「山が移り、丘が揺らぐこともあろう。しかし、わたしの慈しみはあなたから移らず、わたしの結ぶ平和の契約が揺らぐことはない／あなたを憐れむ主は言われる」（イザヤ 54・10）。「耳を傾けて聴き、わたしのもとに来るがよい。聞き従って、魂に命を得よ。わたしはあなたたちととこしえの契約を結ぶ。ダビデに約束した真実の慈しみのゆえに」（55・3）。

もう一つは「実をむすぶ」という言葉。これは今朝、ヨハネ福音書 15 章で一緒に読んだ通りです。この 15 章には「イエス・キリストはまことのぶどうの木であり、私たちはその枝である」というテーマが語られています。ここで一番大切なメッセージは「私たちはキリストを離れては何の実りを結ぶことができない」ということです。9 節「わたしの愛にとどまりなさい」。11 節「わたしの喜びがあなたがたの内にあり、あなたがたの喜びが満たされるため」とあります。小さく細い枝に過ぎない私は、自分だけの力では何の実りも結ぶことができませんが、主イエスの幹につながり、愛と喜びにつながる時、この私も何らかの愛と喜びの実を結ぶ枝とされていくのです。

このように聖書における信仰とは、第一に神さまが私たちと「結ぶ」という「平和の契約」を感謝して受け取って、自分を神さまに、主イエスに「むすんで」いくことです。具体的には、神さまの呼びかけに心を開き、耳を傾けて聴いて、神さまの安らぎ／平和を受け取っていくことです。

二つ目に、神さまを聖書の中だけに閉じ込めるのではなく、聖書と私たちが日々生きている現実とを「むすんで」、現実の中に働いておられる神さまを見ていく、現実の中に響く神さまの語りかけを聴いていくことです。日曜日の礼拝と月曜から土曜までを分離してしまわない。聖書のメッセージと自分が生きている現実を切り離してしまわない。「むすびつけて」、重ね合わせていくことです。

そして三つ目に、自分の生きる意味を、主イエスの呼びかけの中で考え続けていく。今これから、自分は何をしていくべきなのかを、主イエスの言葉と「むすんで」考え続けていくことです。16 節「わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るように」。わたしはどのような実をむすぶように招かれて、どのような働きに立てられようとしているのか、考え続けていくことです。

そういう意味で、最初に紹介した震災で愛するお嬢さんを亡くされた方の立場に重ねるなら、その方はお嬢さんを思い起こしながら、彼女が生きた意味を考え続け、ご自分の言葉で語ることを自らの使命として受け止めておられるのですけれども、もしその方の傍らに聖書があったならば、お嬢さんの生きた意味を、ご自分の言葉だけでなく、神さまの平和の契約、愛の語りかけの中で、十字架の主の愛の中で、考え続けていくことができる…ということです。震災は、私たちが生きる時に必ずぶち当たる不条理をあぶりだしますが、その不条理の中にこそイエス・キリストの十字架が立てられていることの恵みを覚えていきたいのです。